

母の先見の明

熊本県 廣瀬 幸一

私は、大正十一年一月二十九日、現住所で三人兄弟

のただ一人の男の子として生を受けた。父母は米屋を経営しており、春竹小学校を卒業、鎮西中学へと進んだ。家業を継ぐ計画でいたが、戦争は厳しさを増し、食糧事情も悪化し、配給制度の中で米屋はこの先どうなるかわからない情勢にあった。何か腕に技術をもった職業がいいのではないか。薬剤師はどうかと話が持ち上がった。父は永年孜々営々と業績を伸ばし、頑張って築いてきた基盤があり、どちらかという店に未練が残っていた。できることならこのまま店を続けていきたいと考えていたのも事実だった。一方、母親は、戦争の愚かさ、悲惨さ、言い換えると殺し合い、戦死、という現実が一番気にかかっていた。息子もいずれは兵役につくことだし、薬剤師とか医者第

一線に出る機会が少なく、危険度も低いのではないかと考えていた。兵隊にやらないということではなく、どうせなら人の為にも世の為にもなる仕事がよいと思いい、母自身病身だったのも加わり、親心、女心としての心遣いが私の胸を打ち、母の大きな願望に応え薬剤師になろうと決心をした。

しかし一回目の受験は失敗した。その時、父に来年もう一度薬専を受け、もしものときは米屋をする約束をし、背水の陣で受験勉強に取り組んだ。その甲斐あり、昭和十六年熊本薬学専門学校に合格、薬学生としての第一歩をしるすことができた。

その母も胃ガンと戦いながら昭和十六年九月他界してしまった。享年五十二歳の若さで残念でならなかった。ただ、母の存命中に薬専に入学できたのがせめてもの親孝行、恩返しだったと自分を慰めている。この後述べるが、母の言うことを聞いてこの道に入ったため、生き延びて今日があると感謝している。

日増しに戦局は急を告げ、学生の徴兵延期制度も極く一部を除き廃止された。昭和十八年学徒出陣と大き

く報道された。その結果あと半年を残し、学業半ばにして卒業させられた。このため日本曹達福岡工場に就職入社、一カ月のサラリーマン生活をした。昭和十八年十一月、熊本第十六部隊に入隊。

昭和十九年一月、ハイラルの十八部隊に異動、同年十一月から昭和二十年一月まで、三カ月の研修のため東京の軍医学校へ入校した。研修を終え、見習士官として再び満州へ赴任。新京の貨物廠に転属となった。

終戦は吉林省の教化で知り、八月末に武装解除され、教化の山中で本隊とはバラバラになり、毎日行軍行軍、歩き続け、貨車に乗ったのがどこだったのかもわからないうちに、シベリア鉄道で十五日間走り、バイカル湖畔のタイセットに着いた。来る日も来る日も伐採作業で一年くらい過ぎた。その間、発疹チフスにかかり、四十度の発熱をし意識不明で入院。また、凍傷になり、足の指の感覚が今でもない状態が続いている。いずれも大事に至らず、不幸中の幸いと思っ

る。病院でソ連の軍医と話をしているうちに薬剤師とわ

かり、薬の管理をせよと言われた。戦友に話をしたら医者とか薬剤師とわかると一生婦さんと言うぞと脅されたが、命令に従って一人行ってみると、十畳以上ある大きな部屋に日本やドイツから戦利品として持ってきた薬が、いっしょくたにして山のように積んである。これを使用区分に従って分類せよというのである。寝起きもこの部屋で一人ですることになった。ただ、いつまでという期限つきでなかったのが一つの救いでもあり、一面責任の重さも感じた。

一方、ソ連の将校が男女ペアで部屋を貸せという。これも命令？ 何時間か外に出て人の情事の手助けをする珍現象、奇妙なことも、しばしばあった。その余禄として、タバコをはじめ欲しいもの、好きなものを望み通りに持って来るといふ条件つきで、どっちが抑留者が疑いたくなるような経験もした。

薬の仕分けをしながら日ソの軍医の手術の手伝い、ガゼ、包帯の交換等の加勢をし、別世界で過ごした。約一年間だったが、いろんな想い出が浮かんでくる。

そうこうしているうちに昭和二十二年の七月のある日、病院長が「陰日なたなくやってくれた。ハラシヨウラポーターとして何か欲しいものはないか」との問いかけ。「今一番欲しいのは命だ。郷里には年老いた父親がいる。女の兄弟はいるが男は自分一人だから早く帰って世話をしたい。とにかく早く帰してくれ」と返事をしたら「ほんとに真面目によくやってくれた。希望をかなえよう」と一枚の紙にサインしてくれた。水戸黄門の印籠のような力強いフリーパスを貰い、列車に乗り、病人看護という名目でナホトカ港へと向かった。

先述したように、亡き母の先見の明で薬専で学んだことが苛酷な強制労働から解放してくれ、早く帰国できるきっかけを醸し出し、命を救ったと言っても過言ではないと思っている。母の愛情が実り、感謝、感激でいっぱいだ。

ナホトカの収容所で同室のテントが何者かにより切りさかれる事件が起こった。悪質だから全員帰さないと言う。順調だった抑留生活が土壇場にきて大変なこ

とになってしまった。一週間たった頃、誰か自首したのか、その犯人がわかり、無事第一大拓丸に乗船、舞鶴へと帰路を急いだ。

昭和二十二年七月二十二日、懐かしの熊本へ。在ソ中、割に楽な仕事だったはずだが、見えない心労も重なったのか栄養失調気味で一年くらい家で静養をした。というのも思うような勤め口がなく、色々と考えた末、昭和二十三年四月自宅を改造し薬局を開いた。開業にあたり相当の資金が必要で随分悩んだが、思い切って船出した。昭和二十四年三月結婚し、三人の子宝に恵まれ、大学を卒業しそれぞれ自立している。

開業はしたものの経営は厳しかった。昭和二十年代後半みかんがブームに乗り景気がよく、丁度向かいにできた三陽自動車学校にみかん農家の奥さん達が大量の教習に來始めた。免許取得のための写真が必要になり、これに目を付け、趣味でカメラをいじっていたので、これを生かし写真屋も一緒にやることにした。大当たりで、夫婦二人夜中まで現像、焼き付けの仕事をし、収入の足しにしたことも想い出の一つだ。妻は何

と化粧品取り扱いも始めていた。

昭和四十年、第一工業高校（現開新工高）の化学の先生にと話があり、薬局は友人の名義を借りて営業することにし、学校の非常勤講師となった。どうせなら常勤してくれと要請され、昭和五十二年まで教職の道に携わった。半年程失業保険を受け、同年九月コルセイ・ドラッグ薬品販売会社に勤務、平成二年まで働いた。

現在は近くの学校法人常盤調理学校の非常勤講師として、週に五時間くらいの講義をしている。若い人の中に入り仕事ができるのは、健康のためにも最高と思っている。

数年前、孫と共に、帰国の第一歩を印した舞鶴の引揚者公園を訪ね当時を偲んできた。

バイカル湖の思い出

熊本県 島野郁啓

大正十年二月二十四日、八代市で産声をあげ、地元の小学校を終え、八代中学へ。昭和十一年、中学四年のとき熊本へ移転、熊本中学へ編入試験をパスして転校、二年間学び、早稲田大学専門部商科へ入学。昭和十七年三月卒業と同時に朝鮮総督府忠清南道庁へ奉職。官庁勤めが性に合わず一年勤め退職し帰郷。

昭和十八年二月一日、熊本の本十三連隊に入隊。同年四月ハイラルの歩兵二十三連隊へ転属。

昭和十九年八月、錦州省阜新の歩兵第二四一連隊へ転属し、乙幹の軍曹として初年兵教育に従事した。分遣隊として赤峰に行き、万里の長城付近の八路軍の討伐に遠征した。

終戦直前熱水で陣地構築中、錦県から部隊ごと奉天に移動し終戦を迎えた。奉天に武装したまま一カ月滞